12. 関連資料・水試ニユース、(58年10月発刊・第11号) 浮魚礁とその効果について。

カツオ、マグロ、シイラ等の表層性の魚が浮遊物に付くということは、古くから知られており、その習性を巧みに利用しているのが〝漬け〟で有名なシイラ漬け漁法である。このシイラ漬けは本土では普通見られるものであるが、本県では国頭村宜名真が唯一で、ここでは部落的行事で50余年前から毎年8月～11月に〝ウキ〟と称してシイラ漬けを3～5基地先海面に設置して曳縄で主にシイラを漁獲している。このシイラ漬けは、浮魚礁としては比較的沿岸域で容易に設置され、利用されるが、最近は、沖合のカツオ、マグロをねらって浮魚礁の開発研究が進められており、県内でもその効果が認識され設置への関心が高まったこともあって、昭和57年からは県や市町村が浮魚礁設置のための補助金を関係漁協へ出すようになり、次第に普及するようになって来た。水産試験場でも57年度竹製と亜鉛パイプ製の浮魚礁を2基製作し亜国島北約30kmのところに設置して集魚効果等を調べて来ている。また糸満沖には中層浮魚礁を本土メーカーとの協力で設置し集魚効果と付着生物等について調べて来ているのでその概要を報告する。

1. 浮　魚　礁

孟宗竹と亜鉛パイプの2基合わせて約100万円（全費用）で製作した。魚種はキハダ仔（キメジ）が多く、次いでシイラ（まんびき）、サワラ、カツオが蝟集し約3000kg漁獲している。浮魚礁を中心として集魚分布範囲は、シイラが30m～500mで100m～300mの範囲に多く見られ、サワラは50m～1200mで100m～500mの範囲に多い、またカツオ、キメジは70m～300mで100m～400mの範囲に多く群または1～数尾程度で確認されている。

2. 中層浮魚礁

糸満沖の浮ン曽根の水深72mのところで56年2月から57年11月まで本土メーカーとの協力で設置し、サワラ主体にキメジ、カツオ等を漁獲している。また一連の潜水調査の結果から魚群の蝟集状況をみるとツムブリ（ヤマトナガイユ）が顕著な集魚効果を示し、80cm位のが大きな群をなし、その外にヒラアジ類（ガーラ）、ムロ（ナガユー）、スマ、キメジなどが集魚しているが、ツムブリ、ガーラ、ムロは魚獲対象になっていない。付着生物は多く、オオアカフジツボ、ミドリアオリガイ、カヤ、ガンガゼ、ハナヤサイサンゴ、海藻などがどの部位にも相当確認された。

以上がこれまで試験調査した結果の概要であるが、本年度も浮魚礁を1～2基伊江島北西沖35km付近に設置するが、あまり費用をかけず（全費用8万円程度でロープは不用在庫品を使う）孟宗竹を1本立て、浮魚礁としその効果等を調べる予定です。

浮魚礁に対する認識が高まり、各地に設置されて来ていることは、省エネ的で漁場造成の面でも結構なことであるがまだ次の点で問題があるのではないか。

① 沖合の深い所でカツオ、マグロ等を目的とするときは費用（ロープ代が大きい）がそれ相当かかること。

② 用途、魚具等設置場所選定方法

③ 風波、流況等の影響など、資材の耐用、設置方法の問題

④ 繊維管理をどうするか、そしてどのように利用させるか(誰れにでも広く利用させるか)

⑤ 集まった魚を獲る工夫など

⑥ 中層浮魚礁については付着生物とその重量による浮力、耐久性への影響などとあわせて、ツムブリ、ムロ、ガーラなどせっかく集まった魚の漁獲法、利用の面で十分検討する必要がある。